

みり

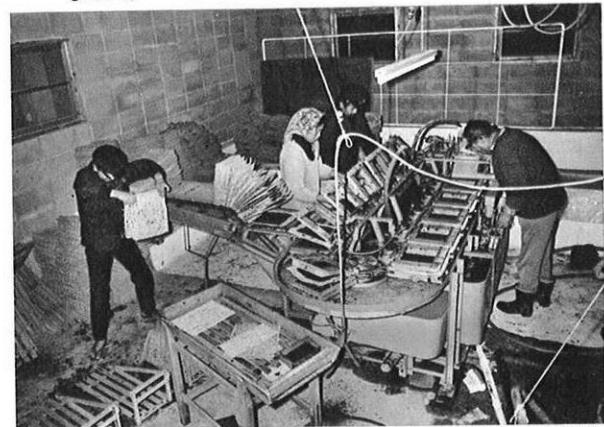
飽託郡天明村海路口



のりの採取風景



上・のりの種苗培養所。カキガラの上にのりの胞子をまいて……



上・自動のりすき機。この機械のおかげで労力は軽減されている。



上・のり共販所での入札風景

肌をさすような寒風をついて、海苔摘採船が一斉に海へ出でゆく。

11月から3月までの最盛期には、部落全体が戦場さながらの活気を呈する。

海路口漁協では、30年から32年にかけて、全国でも初めての人工種苗培養の実用化に成功。この結果種苗の購入価格が従来のままでなく、統一された種付け技術で種苗も安定し、これが生産の安定にもつながった。さらに、35年には火力回転乾燥機を、39年には自動海苔すき機を導入し、また昨年から海苔摘採の機械化が進み現在ではともに80%の普及を見ている。

これら機械化によって、労力は激減され特に天日乾燥時の長雨などによる被害も解消された。

また、今年から、気象の急変で、あかぐされ病などによる不漁時の対策として、予備の種網を冷凍保存しておくなど、新しい試みが行なわれている。



上・火力回転乾燥機。従来の天日式よりうんと早く、清潔だという。



上・漁協ではのりの品質検査を厳重に行っている。

木下順二は現在活躍中の作家、初め戯曲家として立ち、名作「夕鶴」は舞台にせられること数百回、同じく「風浪」は明治初年の熊本の青春を描くもので熊本人には特に感銘が深い。球磨生れだが晩年を熊本に送った。「それからの武藏」の小山勝清は昨年物故したが、武藏の遺跡に富む熊本やその近郊を思うと「宮本武蔵」の吉川英治とともに記憶されるべきであろう。

その他の在熊の作家には森本忠、永松定荒木精之、土村伸らがあり、最近「明治十年」で熊日文学賞を受けた森川譲は第一回夏目漱石賞を受けている。

「森の都」の名づけ親といわれる夏目漱石は、足かけ五年も熊本にいただけ、その作品には熊本から得た題材や影響が格段に多い。

八雲が松江中学から五高の教師として着任したのは、漱石より五年ほど早い明治二十四年（一八九一）だが、最初の宿は前記手取本丁の赤星晋作邸であった。筆者は晋作の嗣子典太（八雲の教え子で元熊本その他の知事）翁の許に親しく出入りしたので八雲が特に造らせた神棚のことや、隻眼近眼の彼が煙管の火で脳に焼きこげ作った話、同僚秋月胤永翁との親交などについて屢々聞かされた。

八雲の作品で大衆的に知られたものは少い。先年映画化されて外国にまで声

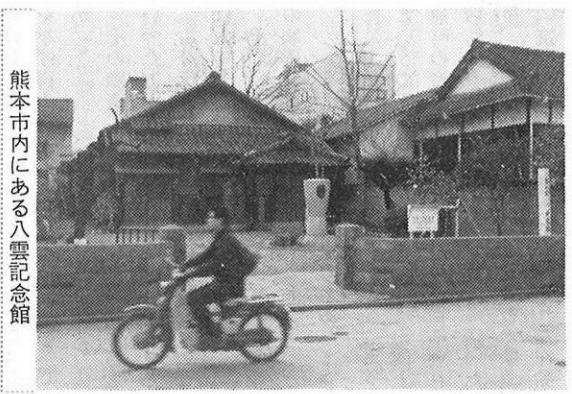
が全巻にあふれている。

徳永直は熊本市近郊の生れ、印刷工その他労働に青年期を送って社会主義に傾き、後年の作品は皆その思想的背景から生れた。印刷工場のストライキを扱った「太陽のない街」はその代表作で、当時のいわゆるプロレタリア文学の古典とされた。

木下順二は現在活躍中の作家、初め戯曲家として立ち、名作「夕鶴」は舞台にせられること数百回、同じく「風浪」は明治初年の熊本の青春を描くもので熊本人には特に感銘が深い。球磨生れだが晩年を熊本に送った。「それからの武藏」の小山勝清は昨年物故したが、武藏の遺跡に富む熊本やその近郊を思うと「宮本武蔵」の吉川英治とともに記憶されるべきであろう。

その他の「三四郎」にしろ、「我輩は猫である」にせよ、その素材は皆熊本の生活で醸釀されたもので漱石作品に占める熊本の比重の高さを如実に知ることができ。一方光琳寺町、合羽町、大江村（町）井川渕町、内坪井町、北千反畠町と軒々住居をかえた漱石の足跡も熊本にとって記念すべき文化遺跡といえよう。

漱石を語る時いつも引合に出されるのなると古典的な名作も少くない。先ず挙げられるのは森鷗外、彼は小倉師団の軍医部長當時熊本を訪れただけに過ぎないというが、その作品の中、特に歴史ものに多くのモチーフを得ている。「興津彌五右衛門の死」「阿部一族」「都甲太兵衛」「津下四郎左衛門」等がそれで、中でも「阿部一族」は代表的なものである。



熊本市内にある八雲記念館

眼を転じて熊本に取材した小説作品となると古典的な名作も少くない。先ず挙げられるのは森鷗外、彼は小倉師団の軍医部長當時熊本を訪れただけに過ぎないというが、その作品の中、特に歴史ものに多くのモチーフを得ている。「興津彌五右衛門の死」「阿部一族」「都甲太兵衛」「津下四郎左衛門」等がそれで、中でも「阿部一族」は代表的なものである。

八雲が松江中学から五高の教師として着任したのは、漱石より五年ほど早い明治二十四年（一八九一）だが、最初の宿は前記手取本丁の赤星晋作邸であった。筆者は晋作の嗣子典太（八雲の教え子で元熊本その他の知事）翁の許に親しく出入りしたので八雲が特に造らせた神棚のことや、隻眼近眼の彼が煙管の火で脳に焼きこげを作った話、同僚秋月胤永翁との親交などについて屢々聞かされた。

八雲の作品で大衆的に知られたものは少い。先年映画化されて外国にまで声

が全巻にあふれている。

蘆花は蘇峯の弟、終生新聞記者を以て任じた蘇峯に対して、蘆花は小説家として立ち、明治期のベストセラーNO.1であつた「不如帰」を始め、「思い出の眼」「富士」等々の小説を書き、「自然と人生」に始まつて「日本から日本へ」に到る多数の隨筆や紀行を著した。

中でも「思い出の記」の如きは蘆花の青年期をモデルとしたもので熊本の匂いが全巻にあふれている。

蘆花は蘇峯の弟、終生新聞記者を以て任じた蘇峯に対して、蘆花は小説家として立ち、明治期のベストセラーNO.1であつた「不如帰」を始め、「思い出の眼」「富士」等々の小説を書き、「自然と人生」に始まつて「日本から日本へ」に到る多数の隨筆や紀行を著した。

中でも「思い出の記」の如きは蘆花の青年期をモデルとしたもので熊本の匂いが全巻にあふれている。

その他「三四郎」にしろ、「我輩は猫である」にせよ、その素材は皆熊本の生活で醸釀されたもので漱石作品に占める熊本の比重の高さを如実に知ことができ。一方光琳寺町、合羽町、大江村（町）井川渕町、内坪井町、北千反畠町と軒々住居をかえた漱石の足跡も熊本にとって記念すべき文化遺跡といえよう。

その他「熊本と文学」の線上に浮かぶものに、漱石の後で五高に来たこれも英学者の厨川白村、漱石の愛弟子で物理学者兼随筆家の吉村冬彦（寺田寅彦）現存者では上林曉などがある。

それに対しても熊本や熊本人はあまり好きでなかつたらいいことが、彼の手紙などに敬見するのはこれも皮肉な話である。

「おい、と声をかけたが返事がない」という峠の茶屋に始まる「草枕」、阿蘇登山の道中を描いた「二百十日」の如きは、漱石が五高在勤中同僚の山川信次郎と二人行を共にした体験を素材に書いたものといわれ、現に「草枕」で滞留した小天と「二百十日」で一泊した内牧の宿には、それぞれ当時の遺跡が伝えられている。

その他「三四郎」にしろ、「我輩は猫である」にせよ、その素材は皆熊本の生活で醸釀されたもので漱石作品に占める熊本の比重の高さを如実に知ことができ。一方光琳寺町、合羽町、大江村（町）井川渕町、内坪井町、北千反畠町と軒々住居をかえた漱石の足跡も熊本にとって記念すべき文化遺跡といえよう。

その他「熊本と文学」の線上に浮かぶものに、漱石の後で五高に来たこれも英学者の厨川白村、漱石の愛弟子で物理学者兼随筆家の吉村冬彦（寺田寅彦）現存者では上林曉などがある。

それに対しても熊本や熊本人はあまり好きでなかつたらいいことが、彼の手紙などに敬見るのはこれも皮肉な話である。